

1970年代前期の開発と保存に関する動向

～沖縄県竹富島における観光文化研究（１）～

谷 沢 明

はじめに

年間約44万人（2007年）の観光客を集める沖縄県竹富島は、自律的な地域づくりが島の魅力を醸成し、吸引力のある観光地の一つのモデルとして知られている。拙稿「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」（2009年）¹⁾において、「きちんとした生き方をもっている人が住んでいる島、それが竹富島であり、その人々が発散する魅力が、豊かな自然環境、島に伝わる歴史・伝統文化と一体となって、島の空気を作り出している。それが多くの旅人を魅了し、竹富島の観光文化を築いている」との指摘をおこなった。

ところで、竹富島において多くの観光客を魅了する、自然・歴史・文化を活かした自律的な地域づくりがおこなわれるようになった背景は、どのようなものであろうか。本稿は、その経緯を明らかにすることにより、地域社会における模範となる観光文化形成過程を学ぶことを目的とするものである。

竹富島では、1986年「竹富町歴史的景観形成地区保存条例」が制定され、同年「竹富島憲章」が「公民館議会」において決議・制定された。それは、集落景観を保全し、伝統的文化を継承しつつ島の振興をはかろうとする住民主体の地域づくりに対して、島民の合意形成がなされた象徴的な出来事、と捉えることができる。

この合意形成までの道のりは決して平穏なものでなく、多くの困難に対峙する難渋に満ちた過程でもあった。復帰直前の竹富島では、度重なる干ばつ、台風の天災に見舞われるとともに、1971年に本土企業により島の東部の土地13.5ヘクタールの買占め騒動がおこった。外部資本による観光開発行為がおこなわれようとしたのである。この買占めや観光開発構想に対して島民の気持ちは揺れ動き、島民・島出身者、さらには島外関係者の間でのさまざまな思惑がぶつかりあい、やがて有志が「竹富島を生かす会」を結成して本土企業からの土地の買占めに立ち向かっていった。

島の行く末に対して、島民がゆるぎなき信念を確立する過程には、島外の有識者の影響を見逃せない。その一人は、竹富島に惚れこみ、復帰前に土地を求めて書斎をつくった作家の岡部伊都子である。また、外村吉之介（倉敷民芸館長）をはじめとする民芸運動の指導者たちとの交流が、その後の文化的観光を目指す島民の精神的支柱を形成する上で重要な意味をもっていた。

本稿では、以下、喜宝院蒐集館所蔵資料を中心に、関係者のインタビュー調査を交え、1970年代前期の竹富島における開発と保存に関する動向を整理したい。なお、文中、敬称を省略したことを、おことわりする。

1. 土地買い占め

1969年11月22日、佐藤・ニクソン会議で72年沖繩返還に合意する日米共同声明が発表された。それから1年余り経った日の新聞報道(1971.1.16)²⁾に次の記事が出ている。

〈復帰の日も決まり、八重山は観光および保養地として注目されているが、本土や大手観光業者、不動産業者、個人が入り乱れて土地の買い占めにやっきになっている。八重山は昨年大干ばつと28号台風に見舞われ、農作物が絶望的な打撃を受けたことから、「農業では食っていけない」と土地を手放す人が多く、土地ブローカーに買ったたかれがち。竹富町や石垣島の観光地にはほとんど買い占めの手がのびており、間もなく八重山の目ぼしいところはすべて本土業者の土地になってしまう—と本気で心配する人も多い。〉

八重山で土地買い占めが目立つようになったのは、日米共同声明発表直後の1970年春からである。買い占めは、初め石垣島に集中していたが、竹富町西表島が国立公園候補にのぼってからは西表島がねらわれた。そして、竹富町では、ほかに小浜島、竹富島に土地買収の手が伸びていった³⁾。

干ばつと台風の天災は、翌1971年も竹富島を襲い、甚大な被害をもたらした。喜宝院住職・上勢頭同子(1947年生まれ)は、その時の島の状況を、次のように話す。

「干ばつと台風で、島は大きな被害を蒙りました。雨が降らなかったと思ったら、次は大きな台風が来て、根こそぎもっていきました。土がなくなるくらいもっていくんですよ。島の人は、これを“地の皮を剥ぐ”と、表現していました。“今度の台風は、地の皮を剥いでいった”という風に。土地の皮を剥いでいく、そんな災害だったんです。皮をむかれた土地は、何を植えても稔らないのです。“私たちは、これからどうして生きていったらよいのか…”、この災害は、そんな、死活問題だったんです。その災害の直後に、業者が入り込みました。“土地を買いますよ〜”という話が口コミで広がったんです。そして、我先に土地を売ろうとする動きがおこったのです」

竹富島は隆起珊瑚礁の島で、その上を薄い表土が覆っている。そのはかない表土を台風が吹き飛ばしてしまったのである。この災害がおきたのは、生産性の低い土地に頼って農業を営んできた島の暮らしが、ほぼ限界にきていた時期であったことも見落とせない。

1971年当時の島の概況は次のとおりである。総世帯数135戸のうち農家数は71戸で、総耕地面積1,589アールであった。農家1戸当たりの平均耕地面積は22アールと僅少である。約10年前の1960年には総世帯数192戸のうち農家数は184戸で、総耕地面積15,350アール、農家1戸当たり83アールの耕地があった。10年間で農家は半減し、耕地面積も十分の一に激減していた。島では甘藷、大豆、小麦などを栽培して自給的な食糧とするとともに、換金作物のサトウキビをつくり、養蚕をおこない、西表島に稲作の作りをしていた。そんな従来の暮らしの立て方が大きく変貌を遂げていた時代の出来事であった。このような変化の中で、竹富島では牧畜が導入され、1960年代半ば、「竹富牧場株式会社(興南牧場)」と「竹富共同牧場組合(組合牧場)」が設立された⁴⁾。1970年、翌71年に立て続けにおこった大干ばつの天災は牧草を枯らし、牧畜にもまた破滅的な打撃を与えたのであった。元公民館長の前本隆一(1930年生まれ)は、その惨状を次のように語る。

「1970、71年と大干ばつが続いたんです。牛が食べる草もない、牛はダニで倒れる。当時、

竹富島にはダニがいっぱいあって、ダニに食われた牛は40度の熱を出してバタバタ倒れるんです。興南牧場の牛もダニに食われて、牧場はつぶれてしまいました。組合牧場もつぶれる寸前でしたが、赤牛から和牛の黒牛に切りかえて、かろうじて生き残りました。興南牧場がつぶれると、その土地を他所に売ってしまいました」

そのような状況の中でおこった、土地の買い占め騒ぎであった。新聞報道（1971.3.30）⁵³に次の記事が出ている。

〈竹富町竹富島で竹富観光開発と福岡開発が土地の買い占め攻防戦をくりひろげ注目を集めている。出足の早かった福岡開発では、すでに約15ヘクタールの土地を確保、内金まで地主に支払っている。竹富観光では「土地が本土業者の手に渡れば古風な部落のたたずまいが破壊される」と、地主に土地売買、契約破棄を説得しているが「いったん契約したのを破るのはしのびない」と、しぶっており関係者をハラハラさせている。

福岡開発と日本習字教育連盟（福岡）が竹富島の東海岸に百ヘクタールの土地確保を決めたのは昨年の末。さっそく今年1月から、西盛正雄さん（竹富島出身で石垣市在住）を通じて、土地の買収をはじめた。現在、約15ヘクタール（地主は16人）に及ぶ土地の売買契約をすませ、内金として地価（坪30セント）の70パーセント、約1万ドルが支払われている。

この事実を、石垣在住の島出身者がキャッチしたのが2月のはじめ。（中略）その日から「大手観光業者に島を売り渡すな」の合言葉で島出身者が結集したという。相手の財力に対抗するため“竹富観光開発株式会社（代表者・山森正治氏）”の設立を準備、沖縄本島、本土の郷友会にも協力を呼びかけた。（中略）約百人の地主の大部分が竹富観光以外に土地を売らないと約束したという。〉

これは、1970年代初頭の竹富島を揺るがす土地買い占め騒動の詳細を最初に報じた記事である。竹富島の土地買い占めは、本土3社・沖縄本島1社によっておこなわれるが、その一つが、日本習字教育連盟（福岡開発と一体となった団体）であった。この動きに触発されて、それに対抗する形で1971年に設立されたのが、竹富島出身者で構成する石垣島「郷友会」を中心とする竹富観光開発株式会社であった。そして、この会社もまた土地の購入を目論んでいた。さらに同年、島内に合資会社竹富観光事業社（代表者・上間毅）も設立され、竹富島の観光開発をめぐる議論がにわかに沸きおこっていく。

2. 島出身者・島民による観光開発のもくろみ

竹富観光開発株式会社設立の経緯は、新聞報道（1971.4.7）⁵⁴によると次のとおりである。

〈福岡開発の動きが1月末ごろ石垣市在住の郷友会代表の耳にはいった。しかも、地主に金も流れている—とのうわさ。この話に腰をぬかささんばかりにビックリした人もいたという。すかさず、山森正治氏（山森商会社長）、白保英行氏（石垣市会議員）、瀬戸淳氏（瀬戸商店社長）らが石垣市と那覇市の郷友会と連絡、その対策を話し合った。その結果、相手の資本力と対抗するにはどうしても株式会社の設立が必要だということになり、竹富観光開発株式会社（仮称・代表者・山森正治氏）の準備を急いだ。〉

竹富観光開発株式会社では、島民を巻き込んだ集会を開いて、本土企業の日本習字教育連盟への土地売却を阻止する動きに出た。同報道を続ける。

〈31日（3月）も公民館で竹富観光主催の“住民大会”がひらかれ「祖先伝来の美しい島を後世にのこすため、一致団結して土地を守りぬく」との決議まで行っており「土地はやはり島外の人に売るべきではない」という方向に地主の気持ちがあうごいている。そのせいで現在のところ（売られた土地は）約15ヘクタール（地主16人）のところで足ぶみ状態だ。（中略）現在、耕地の約70パーセントが荒地地というもうなづける。こうした原野同然の“畑”を放置するより売ったほうが良いと思いつめている農家がかかりいる。現に、日本習字教育連盟の手に渡った土地は「将来も耕作の可能性のない」農家のものが占めていた。竹富観光でも、こういう条件下にある農家をまわり、内金を入れて確保に当たっているが、過疎化現象が観光業者の進出を容易にしているようだ。〉

当時の竹富島は、人口337人・116世帯のうち70歳以上が85人、一人または夫婦暮らしの老人世帯が44世帯を占めていた。若者はゼロにちかく、ここ十年来、島で成人式をあげたことはない状態で、深刻な過疎化の問題を抱えていた⁷⁾。

大手観光業者に心を痛めている喜宝院・上勢頭亨、作家・岡部伊都子の声が新聞報道（1971.4.10）⁸⁾に掲載されている。上勢頭亨の談話は、次の通りである。

〈私たちは島のたたずまいを、そのまま子孫に残そうと努力しています。外村吉之介倉敷民芸館長、陶芸家・浜田庄司氏、郷土出身の山城善三氏たちからも、ふるさとを守ってほしいと激励を受けている。〉

また、岡部伊都子は、次のようにコメントしている。

〈観光とは文字どおり光を見ることだとおもう。つまり、竹富という“光”に照らされようと訪れるわけです。ですから島の人たちは毅然とした態度であぐらをかき、自分の生活を堂々と営めばよい。観光者は客ではありませんからサービスはいりません。〉

このような議論が渦巻く中で設立された竹富観光開発株式会社は、はたして何を目指していたのであろうか。「竹富観光開発株式会社設立趣意書」（1971.2.16）⁹⁾には発起人として山森正治はじめ59名が記されており、経緯を記した「前文」、および「竹富観光についての基本的姿勢」「竹富観光開発株式会社設立の趣意」が掲載されている。まず、「前文」¹⁰⁾に記された経緯を記す。

〈瀬戸弘町長は、「すでに業者が本土三者、沖縄一社から竹富に於ける観光事業の斡旋依頼申込みを受けているが、ことが重大なだけに、竹富島出身者多数の意見によって決めて貰いたい」と、ことの処理に慎重を期して進めたいとの意向で、その相談を受けた私達は、竹富観光問題に取組むキッカケとなったワケであります。〉

討議の結果、まとまった総合的な意見として、「竹富観光についての基本姿勢」¹¹⁾に次の記載がみられる。

〈祖先が血と涙と生命を注いで受け継がれたふるさと竹富を守り、子々孫々に引き継ぐことの責務の重大さに鑑み、竹富の運命の岐路に誤りなきよう、悔を千載に残さないよう、又社会の笑い草にならないよう決意を新たにすべきと信じます。〉

続けて「竹富観光開発株式会社設立の趣意」¹²⁾について紹介する。

〈土地は売るな、と警鐘してみても、前記の通り売りたい地主がかかり居るワケで、愛郷心と云ふ精神面のみでは解決出来ない悩みがあり、此の打開策として、竹富島出身者だけの会社

を設立し、売りたい土地を他人の手へ渡ることから守るために、此の会社が買受けよう。(中略)島の荒れ果てたところは整備して、意欲的に観光事業に取組んでみよう。そして今後の島の諸行事をはじめ、村の中の観光設備、石垣の修復までも一切会社の手でやらせていただき竹富の人々は全員会社で働いて貰い、会社を中心として竹富人がひとしく心豊かに又経済豊かに共に永遠の繁栄を目指して邁進致したいのであります。)

そして、「事業目的」として、「竹富町を中心とする観光事業の開発」をはじめ十項目¹³⁾が挙げられている。「趣意書」にしては、何のために会社を設立するのかという、明確な目的・方針が欠落している。町長から「観光事業の斡旋依頼申込みを受けているが、ことが重大なだけに、竹富島出身者多数の意見によって決めて貰いたい」と相談を受けた、と記しているが、町長が島民ではなく、島外にいる出身者に話を持っていったこと自体が不可解である。「売りたい土地を他人の手へ渡ることから守るために、此の会社が買受けよう」、会社設立の目的は、この一文のみである。理念らしきものがまったく見られない。「島の諸行事を一切会社の手でやらせていただきたい」とは、思いあがりもはなはだしく、島に止まっている人への配慮が欠落している。「竹富の人々は全員会社で働いて貰い、会社を中心として竹富人がひとしく心豊かに又経済豊かに共に永遠の繁栄を目指して邁進致したい」と、雇用に対しての経營的見通しを抜きに理想論を述べている。文面から「経済的繁栄」を目指したことが会社設立の大きな目的であったのではないかと読み取れる。

竹富観光開発株式会社の内実及び、その後については、聞き取り調査によると、次の証言がある。まず、南西観光株式会社専務取締役・瀬戸孝(1932年生まれ)の話を紹介する。

「竹富出身で石垣に来て、商売して儲けた連中が竹富観光開発株式会社をつくって、竹富の土地を買い占めたんです。島の人も、“先輩だから。島を守るからいいんじゃない”と言って、土地を売ってしまった。竹富観光開発株式会社は、土地を買っただけで、開発をしないで、名古屋鉄道に売ってしまった。“守る、守る”と言いながら、土地を買い占めて売っちゃった。興南牧場も買って、ほかの土地も買い占めて売っちゃった」

次いで、前本隆一(前述)の証言を紹介する。

「当時、石垣にいる上原秀夫という人が竹富島の土地を買い占めて牧場を経営しようとしていました。島の土地を上原秀夫さんにどんどん売り出すんですね。石垣島におる竹富出身者の金持ちたちが竹富島を守らんといかん、ということで竹富観光開発株式会社という組織をつくって石垣にいる上原秀夫さんから興南牧場の土地を買ったんです。竹富観光開発株式会社は銀行から金を借りて土地を買ったんですが、あとが続かず、その土地を名古屋鉄道に売ってしまいました。山森正治という人が竹富観光開発株式会社の社長でした。彼らは商売人で、ほんとうに島を守る気持ちがあったのかな…」

会社設立のうたい文句は、外部資本から島を守るとなっていたものの、島民の期待を裏切り、ことあるうに買い集めた土地を外部資本に転売してしまったのである。このことは、その後の竹富島に大きな禍根を残すこととなった。なお、土地買い占めは、1971年に初めておこったのではなく、それ以前からおこなわれていた。それは、石垣島在住の上原秀夫が竹富島で牧場経営をするためであった¹⁴⁾。

外部資本による土地買い占め問題に呼応して設立された竹富観光開発株式会社の引き起こし

た問題は、その根底に政治的色彩を秘めつつ、干ばつによる牧場の経営破たんの事後処理の失敗といった意味合いをも含んだ問題でもあった、と捉えることができるのではない。

竹富観光開発株式会社が竹富島出身者を中心としていたのに対し、同じく1971年に設立された合資会社竹富観光事業社は、島内者が設立した会社である¹⁵⁾。合資会社「竹富観光事業実施基本案」(年代不明)は、「趣意説明書」「事業企画表」から成っており、代表社員・上間毅、瀬戸孝、上間瑞穂の3名の名前が記されている。この「趣意説明書」¹⁶⁾には次の記載がみられる。

〈この島を護りつづけて来た島の人達の努力をもちえりみづ、又将来につながる島の生活を無視する島外部者が島の地上権利確保のために動いている。かかる現状に対し、私達若者が島に帰り、島の持つ環境のより次元の高い方向づけと、島のメリット及び離島した若い人達への帰島のための新しい道を開くため当合資会社竹富観光は、若い世代の島出身者の青年により組織して竹富島の観光開発が島全体の自然、風俗の全面的保護を目的とされなければならない。〉

「趣意説明書」の文面には、島の若者が自主性をもちながら地域をつくっていく、という気分がみなぎっている。その点、理念不明の竹富観光開発株式会社の「設立趣意書」とは、異なっている。しかしながら、企画した事業がどの程度実現し、会社がいつまで存続したかは不明である。会社設立の経緯を、関係者の一人である瀬戸孝(前述)は次のように語っている。

「糸満・宮古・八重山・尖閣列島にかけての温泉の権利を持っている大見謝恒寿さんが、竹富にも温泉あるよ、という記事を出したので、竹富の人はあわてて何かをやろうとした。上間毅さんが合資会社・竹富観光事業社を設立したのも、そんな経緯です。僕も最初は加わり、いっしょだった。温泉の権利をとる目的で最初につくった会社が合資会社・竹富観光事業社です。そしたら、すぐに竹富観光開発株式会社ができたんです。代表者の山森正治と上間毅が喧嘩をした。あとにできた竹富観光開発株式会社も温泉を狙ってきたんですが、温泉が取れそうでなかったから、土地の買い占めに動いたのです」

この証言から明らかになるのは、合資会社竹富観光事業社は、温泉の権利を取得して観光開発を目論むために設立された会社であった、ということである。「設立趣意書」にうたわれた理念と、マスタープランの図と照らし合わせてみると、ちぐはぐな感は否めない。その背後には、温泉の権利獲得に向けての争奪戦があったという裏事情が影を落としている、と読み取ることができはしないだろうか。

いずれにしろ、これらは土地買い占め問題に端を発した島出身者および島民の会社設立、観光開発論議であって、事業計画に掲げた観光開発構想は「絵に描いた餅」に終わり、実現をみることはなかった。

3. 岡部伊都子、島への想い

この買い占め騒ぎの最中、上勢頭亨、昇兄弟の世話で、喜宝院の東に14坪の赤瓦の家を建てて、復帰前の竹富島にしばらく住んだ人がある。竹富島に熱い想いを寄せる作家・岡部伊都子である。岡部は、「島への手紙」¹⁷⁾と題して地元紙に次の一文(抄)を寄せている。

〈ひとことに言えば「島に惚れた」のだ。

1968年の春、竹富島におりたってはじめて「わがふるさと」を意識した。生誕のゆかりではなく、長じた自分が自ら選ぶ「ふるさと」である。これまではずいぶんきびしく「ふるさと」的発想を拒否してきたわたしだった。だが思いがけなく素直に「還りたい気持」になれる島とめぐり合ってしまったのだ。

島よ。あなたが美しく生きる道を選んで下さい。

美しく保たれてきた島の家並。整然とととのい、清潔に掃除がゆきとどいている珊瑚砂の白い道、ゆきあう人びとのやさしい会釈、警官派出所ひとつない安らかな信頼、そういった尊い姿を大切に、わたしもそのなかに溶けこみたい…。

だが、なんということだろう。あこがれの島にみなさんの心こもる棟がたったという頃になって、重苦しい不安にさいなまれるようになった。竹富島が光りをあびるのはうれしいが、なんだか観光的に歪められそうな不安がきざしてきた。京や奈良や、これまで美しい土地とされてきたところが、おそろしい勢いで荒廃してゆく。あの美しい島がもし観光資本の手にかかったら、あっというまにつぶされてしまうだろう。

文明に傾倒してその毒に汚染され、川も海も死につづける本土で、俗悪な観光化がいかに人間の生活をほろぼすものか、いやというほど知っている。先島に僅かにのこる尊い美しさを、いまになって観光資本に売り渡す手はない。もちろん、先島、離島の生活は何かと豊かに便利に進歩させるべきだが、美しい海から魚や珊瑚をほろぼし、自分たちの漁場を失うようなことがあってはならない。観光化は資本家を太らせるだけで、住民個々の清らかな生活は奪われるのではないか。

あの優雅な自然と人間が導び合って暮す美しい心情と、清潔な生活こそが本来の人間の文化だ。真の文化を生かす島、竹富島でありたい。〉

竹富島の「自然と人間が導び合って暮す美しい心情と、清潔な生活」を観光開発で失わせたくない、との想いがひしひしと伝わってくる。岡部伊都子と親しく接した喜宝院の上勢頭同子(前述)は、岡部の人となりを次のように語る。

「岡部先生は、欲がまったくない方です。私もお目にかかりましたが、とてもおちゃめな方でした。子どものまま大人になってしまった、といった感じの方でした。最初の頃は、着物姿でした。琴を弾きながら、か細い声で唄を歌われていました。お身体の具合が悪くなると、モンペなども身につけていました。

岡部先生は、自然と共に生きる生き様を見せてくださり、生かされていることへの感謝をいつも口にされていました。魚も蝶も鳥もみんな歌いながら飛んでいる、こんな島をいつまでも守り続けるのは人間の心しかない、そのようなことを島の人たちに伝えておられました。私は、先生の一言、一言の言霊が好きでした。先生の文章を読むと、何とも清らかな気持ちになります。水の流れがいつまでも淀まない、そんな心を持った先生でした。清らかな先生だというイメージは、島の人、皆、持っていました。“人間として、あんなに欲がなくて生きられるのかなあ”と、疑問をもつくらい素晴らしい先生でした」

「島をいつまでも守り続けるのは人間の心しかない」、それが、岡部伊都子が島の人びとに説いた訓えであった。前述した土地買い占めの新聞報道(1971.3.30)¹⁸⁾に岡部伊都子のコメントが、「中立派の意見」として掲載された。これを読んだ岡部は、「わたしは中立ではなく、観

光企業の開発には大反対の志をもつ者」と、改めてその考えを紙上に寄稿することとなった。それは、次に示す「“観光開発”という名の新しい形の収奪」(1971.4.6)¹⁹⁾という一文(抄)である。

〈沖縄にとって再三にわたる不幸がおしつけられないように、あくまでも毅然とした自主性と沖縄の誇りをもってきびしく立ちむかってほしい。(中略)

本土政府がおしすすめている企業優先の政策は、続々と過疎の地方をつくった。農民に田畑を愛しむ心を失わせては土地を奪い、繁栄の名によって工場をつくり、企業の繁栄とひきかえに国民の生活をみごとに汚染させた。(中略)人間尊重のたてまえのなかで行なわれている現実がこれだ。

かつては、本土の各地方にも美しい自然が存在していた。が、そのなかで人間は貧しく苦しんだ。それが、無抵抗に観光資本に土地を売り渡し汚染、醜悪化を許したひとつの原因であろう。その地方独特の持ち味を生かせ、住民の生活を向上させる愛情のこもった行政がみられず、企業資本の利益のための進出だけが地方開発とされる政策に対して、深い大きな怒りを覚えている。(中略)

先島の自然と人情とを、いまごろになって観光資本の手に売り渡すなんて、もったいなさすぎる。観光資本は、土地住民を幸福にするよりも、土地の人間を利用し酷使し、住民の生活を破壊することになるのではないか。いかに観光開発がなされても、観光者がおとす金銭は観光企業の利益となり、住民ひとりひとりの清くおだやかな生活はみだされ、新しい形の収奪が行なわれよう。それは本土での地方の観光地に共通する状態である。先島の住民生活をうるおしよろこび多いものにすることは当然だが、俗悪な観光地化をゆるして、みずからの美と尊厳をみずから放棄しては、これまでの苦労が水の泡である。

わたしは竹富島が島自身の力で島の美しいたたずまいを守ろうと決議されたことを尊敬する。そして島自身の努力で島の文化が生かされることを願う。一部の人びとだけがうるおうのではなく、みんながうるおう生活。業者に雇われずとも島の手で適材適所に働く場をつくる。(中略)浜辺を清潔に、緑を大切に、静けさのなかでいきいきと文化的に生きる島でありたい。

文明化とひきかえに、なんと多くの人間らしさが見失われたことだろう。文化とは文明に盲従することではなく、自主的な生活のなかで美をうむことだ。(中略)観光者を観光客だという意識で迎える必要はない。真の観光とは光を観るの意。享楽とはちがうのである。

島は島自身の尊さを強く自覚して、住民がしっかりと力をあわせ観光化を拒否したい。ありふれた観光施設がつくられていないからこそ、島は多くの人間の心を照らす光となり得ているのだ。(中略)住民の間によほどきびしく強い姿勢を今の間に確立しておかないと、目もあてられない破滅となる。利によって環境も魂も失う危険にさらされていることが納得されたなら、きっと、すでに土地売り渡しを承諾された方もわかって下さるだろう。土地を売りいそぐことはない。(中略)観光資本は島から奪う。それを思ってどうか考え直して下さい。〉

ここには、「島自身の努力で島の文化が生かされることを願う」「静けさのなかでいきいきと文化的に生きる島でありたい」「ありふれた観光施設がつくられていないからこそ、島は多くの人間の心を照らす光となり得ているのだ」など、竹富島の将来について示唆を与える言葉があふれている。

その後、竹富島の地域づくりを牽引する「竹富島を生かす会」（1972年発足）の代表者である上勢頭昇（1926年生まれ）は、岡部伊都子の赤瓦の家をつくる際、実兄の亨とともに世話をするとともに、親しく接した人でもあった。この岡部の訓えは、やがて「竹富島を生かす会」の精神の基調に流れ、受け継がれていくことが重要である。

4. 外村吉之介と日本民芸協会

日本習字教育連盟、竹富観光開発株式会社の両者が土地の買いあさりをしている最中、日本民芸協会の幹部と島民の共同で「古竹富島保存会」（1971.5）が設立された。これは、土地買い占めに苦しむ竹富島を支援し、近代的な開発による破壊から竹富島を守ることを目的とした組織である。「古竹富島保存会設立要項」には、趣旨・事業²⁰・会員・運営が記され、「古竹富特別保存地区」の図が添えられている。発起人として、松方三郎、浜田庄司、芹沢銈介、外村吉之介、バーナードリーチの5名が名を連ねている。いずれも我が国の民芸運動をリードした重鎮である。仮事務所は、倉敷市本町の外村吉之介が引き受けた。趣旨には、次のように記されている。

〈沖縄の南端に在る小さな竹富島が、近来世の注目を集めるようになりましたのは、その自然と人情と生活とかが、沖縄の純粋な姿を保ちつづけているからであることは、周知のところであり、誰もこれを美しい天下の至宝と思わぬ者はありません。しかるに、この島に、にわかに近代的な開発の手がつけられて、その古格ある統一は亡ばされようとしております。まことに悲痛にたえず、断腸の思いがいたします。それゆえわれわれは、今、ただちに要路有志の各位と共に、古竹富保存会を設立してこの島を破壊から防ぎ、その保存を期したいと存じます。〉

この一文から、竹富島の価値を「自然と人情と生活とかが、沖縄の純粋な姿を保ちつづけている」ことに見だしていることが読み取れる。それは、前述した岡部伊都子の考えと共通性がみられる。

会の運営は、「現地と全国より実行委員をえらび」とあるが、現地の竹富島からどのような人々が実行委員に加わったのであろうか。「竹富島保存会、一九七一年五月、発起人」と記した一枚の書類が残されている。²¹そこには、民芸運動をリードした先の5名のほか棟方志功がこれに加わり、竹富島の人11名の名が記されている。以下、島民を記載順に列記すると、安里亨、小浜方要、富本忠、上勢頭亨、上勢頭昇、大山貞雄、与那国清介、根原真雄、島仲長正、小底朝泉、前本隆一である。

ここに名をあらわす唯一の存命者・前本隆一（前述）は、次の証言をしている。

「島が買い占められたら大変だということで、10人のメンバーで“保存会”をつくったんです。会長は上勢頭昇さんで、西部落から上勢頭亨、安里亨、小浜方要、富本忠が、東部落から大山貞雄、根原真雄が、仲筋から島仲長正、小底朝泉さんが加わり、そして私を含めて10名のメンバーでした（与那国清介は違う）。昇さんが“金是一代、土地は末代”と看板を書いて、私が立てました。

ヤマトの先生方も応援してくださいました。外村吉之介先生たちが竹富に来て、“素晴らしいところだ、竹富を保存せんといかん”と、この方たちも本土の方で保存会をつくって応援して

くださいました。しばらくして、島は守ったから、“生かす会”にしようということで名前を変えたんです。“生かす会”は、西部の上勢頭亨、東部の大山貞雄、仲筋の島仲長正さんの3名が発起人です。ヤマトの先生方も僕らの会に入会させてくれということで金を集めて本土から送ってきてくれました」

「古竹富島保存会」がどれだけの実践活動をしたのかは、それを物語る資料に出会っていないので、明らかにできない。前本隆一の「ヤマトの先生方も僕らの会に入会させてくれということで金を集めて本土から送ってきてくれました」の解釈が、あるいは現実に近いのかもしれない。

この地元のメンバーは、町並み保存運動の源流をなす「竹富島を生かす会」の主要メンバーと重なっている。すなわち、民芸運動との繋がりの中で「竹富島を生かす会」が生れ、それがその後の集落保存につながっていったことが見えてくる。なお、代表者の上勢頭昇は、我が国の民芸運動をリードした外村吉之介・バーナードリーチ・浜田庄司らと交流を持った喜宝院住職・上勢頭亨の実弟に当たるという人間関係も見落とせない。

竹富島と日本民芸協会とのつきあいは古い。外村吉之介が最初に竹富島を訪れたのは、1957年12月24日であった。外村吉之介「世にも美しく純粋な姿」(1962年)²²⁾は、最初に訪れた竹富島での見聞をまとめたものである。織物・工芸品・歌舞についての記述が中心であるが、竹富島の集落景観についても次のような記述がみられる。

〈竹富島の部落は世にも美しく純粋な姿をしています。(中略)ここは家並や石垣が整い、掃除の行き届いたことで模範になっています。村全体がさながら公園なのです。赤瓦の本葺の家と茅葺の家がまじって、どの家も石垣をめぐらし、座敷の前庭に目かくしをもっています。畑にはカラムシと薯とサトウキビが青々とし、蘇鉄が野生のたくましい姿を方々に見せています。糸芭蕉と福木の群にまじって桑の木も屋敷を飾っています。道はサンゴ礁の破片が敷かれて白く清らかにつづいています。色彩の豊かな雄鶏が遊んでいます。澄み切った空の下で無数の写真をとりました。〉

外村吉之介は、その美しく純粋な集落が「近代的な開発の手」により失われることを憂いたのである。

その後、1964年4月15日、外村吉之介ほか、バーナードリーチ、浜田庄司ら日本民芸協会の一行80名が竹富島を訪れることとなった。一行は、竹富島出身の沖縄観光協会事務局長の山城善三の案内により、石垣島から「若竹丸」に乗って竹富島に渡った。わずか9トンの小型船である。当時の竹富島は人口1,026人・216戸を数えていた。当時の人口は現在の3倍ほどあって集落もだいぶ賑わっていたものと思われる。干潮時には船が接岸できなかったため、満潮時を見計らって島に渡った。島に着いた一行は、清明御嶽において前年に結成された竹富民芸協会(1963年9月結成、会長・与那国清介)の会員と交流をした後、上勢頭亨を訪ねて喜宝院に設けられた私設資料館を見学する。それは、今日の喜宝院蒐集館であるが、当時は、わずか8坪の建物の中に約千点の民芸品等が集められていた。上勢頭亨は、屋敷の入口に急遽「竹富民芸館」と書いた幟を立てて、一行を出迎えたという²³⁾。新聞報道(1964.4.17)には、外村吉之介・バーナードリーチ・浜田庄司らの次のコメントが載せられている²⁴⁾。

〈外村吉之介：自然といい、その中に生活している人、または生活自体非常に純粋である。

これは沖縄にはない。この島の最大の特徴は芭蕉、苧麻、絹などの織物である。これらの織物を暮らしの中に取り入れており、そういう人間的なあたたかさが厚い人情となってあらわれている。見事な石垣もここだけに見られるものだけに、古いとかいう単純な考えはすてて、生命のあるあたたかい石垣を大切にしてもらいたい。

バーナードリーチ：蝶といい石といい、人間といい、すべてが一つになっているようだ。人間の顔には鼻や口、目、マユなどがついているが、その一つも欠かせないものと同じように、自然と生活がしっかり結びついている。その自然との結びつきからりっぱな民芸品が出てきたとおもう。

浜田庄司：竹富の民芸は深い井戸を掘りおこしてくみ上げた水と同じである。地下には豊富な水がたくさんあるのをみごとに掘り当てた。ここが本島の民芸と違うところだと思う。地下にあった水を掘りあてても、それは水道にもなる。しかし竹富の民芸はじかにこんこんとわき出る泉である。〉

竹富島のもつ人間的なあたたかさ、生命力、自然との結びつきの素晴らしさを、三者がそれぞれの言葉で讃えているのである。しかしながら、日本民芸協会の一行を案内した山城善三は、当時の島のおかれた状況を次のように語っている²⁵⁾。

〈竹富の民芸は古い時代には盛んだったが、戦後は全滅しかけていた。それは換金になるようなのがなかったからである。ところがその全滅一步手前に現竹富民芸協会長の与那国清介氏がただ一人だけ機を織る亀カツさんが残っているのをみて、琉球政府に補助を願って、機織りを養成した。最初は30人ぐらいだったが次第にふえて現在は50人ぐらいいる。そしていくらか売れるようになったものの、離島のため、資金が苦しくなると那覇や石垣に安く売ってしまう状態である。〉

日本民芸協会一行80名が竹富島を訪れたことは、「民芸の島・竹富」を全国的に情報発信する契機となった、と考えられる。また、山城善三（沖縄観光協会事務局長）、与那国清介（竹富民芸協会会長）、上勢頭亨（喜宝院）らが、1960年代の竹富島の地域づくりをリードしていた中心的な人物であったことも読み取れる。

日本民芸協会と竹富島のつきあいは、その後も続いていく。1970年、竹富島は干ばつと28号台風に見舞われて農作物が絶望的な打撃を受け、翌71年も干ばつが続くとともに台風襲来で多くの民家の屋根が吹き飛ばされてしまったことを前述した。民芸運動をリードする重鎮たちが「古竹富保存会」を結成して支援したものの、天災による被害復旧には、ほど遠かった。そのような状況の中で、岡山県民芸協会が音頭をとって、全国の民芸関係者に竹富島救援を呼びかけるのである。各地から寄せられた義捐金は百七万八千円にのぼり、上勢頭亨（喜宝院）宛に届けられた。竹富島では、生活復興はさておいてその義捐金を清明御嶽の復旧資金に充てることとなった。高い志である。その聖地は、1964年、日本民芸協会一行と竹富民芸協会の人たちが出会ったゆかりの場所でもあった。

日本民芸協会と竹富島との縁は、その後も途切れることなく続き、1988年と2009年夏、日本民芸協会の「夏期学校」が竹富島を会場に開催された。

5. 竹富島を生かす会

「竹富島の声」²⁶⁾という声明文が、「竹富島を生かす会」から発せられている。あいにく年代は不明であるが、代表発起人は大山貞雄、島仲長正、上勢頭亨の3名である。「竹富島を生かす会」の結成時期は、正確にわからないが、すでに「古竹富島保存会」結成と同時期の1971年5月には、その前身となる活動が開始されていたことは確かである。そして、本土復帰の1972年には上勢頭昇を代表者とする組織ができあがっていた。

「竹富島を生かす会」の活動理念は、どのようなものであったのであろうか。その根底に何が流れているのであろうか。それを明らかにすることは、その後の竹富島のたどった道を理解するために必要不可欠である。次に示す「竹富島の声」には、それをうかがい知る切々たる言葉があふれている。

〈本土復帰を前に、一部の不動産業者や本土観光資本、その他の企業などがこれまで見捨てていた先島に目をつけ、巧妙な手段で買収をはじめました。若者が島外に出た留守の島を、資本をバックに安く買いしめて、あくどい利益をあげようとしているのです。

あの人頭税の重圧に耐えて生きぬいた祖先が、血と涙と汗で守り育ててきたこの心の島、コバルトブルーの海、白くつづく海岸線が汚染される、整然とした白砂の道がゴミ捨て場となる、赤瓦の屋根の家々や茅葺きの家々が、俗悪な観光施設になるかと思うと、わたくしどもはじっとしてられません。先祖の尊いいのちの遺産をいまになって売ることはいけません。いまものこる民芸品の島、民俗芸能に生きる島の誇りを僅かなお金のために見失ってはならない。金は一代、土地は末代です。いったん奪われては、もうもとは戻れないのです。

外部資本の進出による観光開発は、島の諸施設を独占し、島のたたずまいを破壊し、島の人情を荒れさせてしまうでしょう。みやげ物が売れたり、住民が従業員として雇用されたりするとはいっても、それでは「自分の自主的な生活はできない」ことになります。どんな契約を結んだとしても、結局は土地所有権の喪失と経済的な圧力のために「自分の島が自分の島でなくなり」ます。住民の発言権が弱くなり、すべて「使う側」の意のままに、島が変えられてゆくのです。

自然も人間も、企業のより大きな利潤追求のためむざむざ使われる、都会的な娯楽施設が乱立して子どもたちの清純さも傷つけられる、住民同士の人間愛までが企業にあやつられてバラバラにさせられ人間らしさを失う、ついにはバー、キャバレー、ボーリング場などがたって、歴史と伝統の竹富島も狂態と汚染の島になるのではないかと、心配で心配でたまりません。

このような悪条件に追いこまれて、島の住民はいま、故郷を無くするか、生かすか。はたまた、金か心かと真剣に考えています。郷土竹富。生れ島竹富。いまこそ住民自身がたちあがって、自分の心と自分の手で島を守り生かさねばなりません。島がとりかえしのつかない姿になるのを、なんとしてでもふせぎ、人間が人間らしく暮せる島として、産業をたかめ、生活向上をめざして努力したいのです。〉

これは、「竹富島を生かす」運動に協力を呼びかける声名文であり、同時にカンパも呼びかけている。島の生活は、天災に見舞われると同時に、1ドル308円の円切り上げにより経済状態が圧迫されており、その中で発せられた声明文でもある。

「竹富島を生かす会」の活動について、関係者の証言を紹介しよう。まずは、メンバーの一

人、前本隆一（前述）の話である。

「竹富島を売ったら大変だ。昇さんは、“金是一代、土地は末代” “竹富島の心” といったものを立てました。昇さんは字が上手だった。昇さんは弁がたつから、書き残すことはしなかった。挨拶でも、下書きはしません。昇さんは、短気であったが、人情家であった。怒ったらはたきます。もう、大変だったよ。

昇さんとずーっといっしょにやってきました。この活動が引き続き、竹富島の町並み保存につながってきているんですよ。あの当時からの苦労というのは大変なもんですよ。昇さんは、そうとう苦労なさっていました。夜は、よく、泉屋に遊びにいったものです。いっしょに三線弾いて歌ったり、泡盛飲んだりしました。私たちは、どうすれば島をよくできるか、どうすれば島のためにつくせるかをいつも考えていました。自分を犠牲にしてでもやったんです。“生かす会”の10人のメンバーはほとんど亡くなってしまって、僕一人しか残っていないんですよ」

次に、上勢頭亨の娘、上勢頭同子（前述）の話である。

「土地の買い占め騒ぎがおこったとき、父の亨、叔父の上勢頭昇、根原真雄、大山貞雄さんらが立ち上がりました。“竹富島は大変だ。どこの誰か分からん人にみんな買い占められて、我々はこの島から追い出される”、そんな、身の危険をものすごく感じたんです。

“いずれは、我々は原住民として囲われて、見世物になるかも知れない”、そんな話すら出て、いろいろな話が飛び交いました。このことを本気に心配したメンバーが集まって、会を結成しました。民宿・泉屋に泊まったことのあるリピーターも智恵を貸してくれました。趣意書をつくって発送したり、島の人に“土地を売らないでください”と呼びかけました。

しかし、“土地を売るなというけれど、金をくれるわけでもない。あんなことはやらんでもええ”と、島の人から反発をくいました。それでも、必死です。“これ以上売らない。食い止めんといけない”ということで、最終的には、もうデモですよ。デモ行進をしましたね（笑）。

“土地は末代、金是一代”と、書いた板のプラカードを担いで、デモ行進です。もう、周囲から砂は投げってくる、石は飛んでくる。手にしたプラカードは、砂除け、石除けですよ。あの時、デモをした人は20人ぐらいいたんですが、一番若いのは私だったかな。“土地は末代、金是一代、皆さん考えてください”と、言いながら、東集落、仲筋、そして西集落を回りました。あの時は、もう、土地を売る側と土地を守る側に、住民が二派に分かれて、取っ組み合いの喧嘩までも起きるくらいの騒動でした」

上勢頭昇の夫人である上勢頭達子（1928年生れ）が健在である。「主人は、とても気が強く、自分がそうと言え、何でもやってしまう人でした」と、その人となりを語るものの、夫人には活動の詳しい話をほとんどすることがなかった、という。

上勢頭達子が寝起きしている泉屋の離れの前に、小さな黒ミカゲの石版が置かれている。そこには、「竹富島のころ」と題した次の小文が記されている。

「輝かしい自然と礼儀正しい人々が仲よく美しく暮らしている竹富島です。草も木も鳥も獣も海も砂も魚たちもみんな生き生き。お互いにこのきよらかな環境を大切に愛しみましょう。人間らしさをたずねる旅、島の文化財や壺やかめなどを尊び、島を傷つけ汚さないよう、珊瑚や魚貝を守りましょう。あなたのおもいでに竹富島のころが熱く長く生きるでしょう。竹富島を生かす会」

この、旅人へのメッセージは、岡部伊都子の心そのものである、と私は捉えている。そして、その精神は、その後の「竹富島憲章」へ流れていったことも明白である。

6. 70年代前期の「観光」の情景

開発・保存に揺れ動いた時期、竹富島が観光地としての要素を少しずつ加えつつあったこともまた事実である。それは、前述した、いわゆる「観光開発構想」とはうらはらに、島民それぞれの自助努力・創意工夫により観光地的要素が加えられていったことを特色としている。

竹富島に訪れる人がじょじょに増え始めたのは1960年代末からである²⁷⁾。1968年、我が国のGNPは1,428億ドルに達し、西独を抜き米国に次いで第2位になり、経済的豊かさを謳歌する時代にはいった。そして、レジャーブームが到来した。しかしながら、公害をはじめとする環境破壊がすすみ、一方では、高度経済成長に疑問を感じる人びとも出はじめた。ちょうどそのような時代の中で、若者を中心とする秘境・離島の旅のブームがおこっていたのである。また、1970年代前期は、竹富島の交通インフラ、宿泊施設が整備された時期でもあった²⁸⁾。

現在、竹富島の観光において島民の収入源となるのは、水牛車観光、マイクロバス観光、民宿、食堂などである。観光名所として旅人に人気のある場所は、「なごみの塔」、西栈橋、喜宝院蒐集館、コンドイ浜（海水浴場）、カイジ浜（星砂の浜）などである。観光客が列をなしている「なごみの塔」は、戦後間もなく集落の人びとに連絡ごとを大声で叫ぶために建てられた塔で、現在、展望台になっているが、二名も登ると身動きのできない「観光名所」である。西栈橋は、西表島に稲作に行くために設けられた栈橋で、何の変哲もない一筋のコンクリートが海に突き出ただけの、夕陽を眺める「観光名所」である。喜宝院蒐集館は、「与那国島、与論島とともに三大民具館の一つだ」と、館長が自慢（自嘲）する、人間自ら資料を手に語り継ぐ、「今時珍しいアナログ民具館」として異彩を放っている。すなわち、竹富島は、観光施設をつくって、観光客を呼び込み、お金を落としてもらおうとする「観光地づくり」には無縁であり続けたことがわかる。そして、その心栄えが、島旅ファンの心をとらえてきたのであろう。

1970年代前期の島出身者・島民による観光開発構想があったもののそれは実を結ばず、島民が手づくり的に始めた水牛車観光・マイクロバス観光・民宿などが成功した。最後に、この三つがどのようにして立ち上がっていったかについて簡単にふれておきたい。

竹富島観光で人気をよんでいる水牛車観光は、1970年代半ばに始まった。現在竹富島に二社があるが、歴史の古い新田観光が本格的に営業を始めたのは1976年からである。水牛は、由布島で竹富島の人びとが稲の作りの農耕用に使役されていたが、農業が機械化されると、水牛は不要になった。そして、由布島で使わなくなった水牛を竹富島にもってきて、荷物運びに使うようになった。民宿・新田荘の大女将・新田初子（1941年生まれ）は、当時の様子を次のように語る。

「泉屋さんが民宿を始めたころは今みたいに送迎用の自動車がなく、水牛車でお客さんを栈橋まで迎えに行っていましたね。水牛車観光が始まる前の話です。また、泉屋さんに泊まったお客さんが水牛を引っ張って遊んでいる姿も見えたものです。水牛はおとなしいから、素人が引っ張っても大丈夫。石垣を壊すこともないです。道の角をうまく回ります。

泉屋さんにすすめられた私たちは、水牛をもっている人たちに声をかけて、4人で水牛車観

光を始めました。やりはじめた頃は、水牛車にお客さんを乗せてコンドイ浜まで行っていましたね。往復1時間です。浜で泳ぐ人は、次の水牛車に乗って帰ってきます。4台が集落と浜を行ったり来たりしていました。そうこうするうちにお客さんが増えてきて、“浜まで行っていたんじゃとてもじゃない”ということで、今のように水牛車で赤瓦の集落内を巡るようになったんです。最初の頃は、主人一人が三線を弾いていました。だから、お客さんは主人を指名してくるんですよ。“三線のある水牛車に乗りたい”って。今、主人が帰ってきたかと思うと、次のお客さんが待っているという状態でした。それではいけない、皆、努力して三線を弾けるようにならないと、ということで皆が習いました」

当時、水牛車は、浜に行く実用的な交通手段として使われていたことが面白い。「安里屋ユンタ」の演奏を聞きながら赤瓦の集落を巡る今日のスタイルができあがったのも、このような試行錯誤の結果であった。マイクロバス観光の始まりについては、前本隆一（前述）が次のように語る。

「マイクロバス観光をしている竹富島交通の始まりは、竹富のバス組合です。小型貨物車に屋根をつけて、後ろの方に木の腰掛をつくってお客さんを乗せて島内観光を始めました。復帰になって、こんな危険なことではダメだ、ということで、許可をもらってちゃんとした小型バスを走らすようになりました。ただ、お客さんの来るのを待っているだけでは商売にならん。石垣島の平田観光のように旅行業者と契約を結ばなければダメだということで、必死でつながりをつけていきました。平田さんを招待してヤギをつぶしてご馳走をしたものでした。平田さんから送っていただいた客を星砂のカイジ浜、海水浴場のコンドイ浜などに置き去りにして、よく始末書をかかされたものでした。

平田さんからお客を回してもらっただけでなく、私たちが独自に集めにゃいかん、ということで、沖縄本島の南西航空に行って頼みこんだものです。営業部長はヤギが好きで、あの人が来るたびにヤギをつぶしましたね。そうこうするうちに、お客が増えだしてバスが間に合わなくなってしまった。カイジ浜などにお客さんを置き去りにして次々に港を往復しないと間に合わなくなってしまったのです。私はしかられっぱなしです。そのバス組合が法人化したのが竹富島交通です」

いかにも草創期らしい話である。復帰前後の民宿もまた不思議な雰囲気漂っていた。竹富島で最初に民宿を始めた泉屋の大女将・上勢頭達子（前述）は、次のように語る。

「観光が始まる前の暮らしは、畑仕事をしたり、お豆腐をつくって売ったりしていました。また、由布島に行ってお米をつくったりしていました。竹富島には田んぼはありません。由布島に仮小屋をつくって、田んぼをならしたり、お米を収穫するまではあっちに行ったりしていました。昔は、帆船で通っていました。行くのに一日もかかるときもありました。大変でした。蚕も飼いましたね。

主人の昇が町会議員をしていた時に、偉いさんがいらして、“ここは民宿が一軒もないから民宿をしたら〜”、また西部の方々にも“屋敷も大きいから、民宿をしたら〜”と言われて、民宿を始めました。民宿を始めたのは復帰前ですから、お客さんはパスポートをもっていらしていました。そして、近所の皆さんにも民宿をやるように勧めたんです。民宿では、夜の9時からいつも宴会でした。お客さんに泡盛を出して、三線に合わせて唄を歌いました。手づくり

の歌集もつくりました。私は、ずーっと炊事場に立っていました。でも、楽しかったです、宴会してお客さんたちが歌っている姿を見ているのは…」

泉屋の現女将・上勢頭享子（1957年生まれ）は岡山県から竹富島に嫁いだ元スチュワーデスである。竹富島に来たのは80年代前期であるが、民宿・泉屋には不思議な空気が漂っていた、と話す。

「昔はオヤジ（上勢頭昇）がいて、私が独身時代に来た頃は、飲みたくもない日もあるのに、“飲め！”と言われ、ゆっくりしたい日もあるけれど、“来い！”と言われ、“また今日もか”と思いながらつきあってしまうのです。そんな雰囲気宿でした。家に帰って一人になったとき、“また竹富に帰りたいなあ”と思うのです」

さらに、民宿・新田荘の大女将・新田初子（前述）は、次のように語る。

「本家の隣に和尚さん（喜宝院・上勢頭亨）がおられまして、和尚さんを訪ねてこられる方がけっこういらっしゃいましたね。泉屋さんは、もうその頃民宿を始めていらしたんですけれど、お客さんがいっぱいになってしまふ。“あんたのところ家も大きいので、泊めてあげて～”ということで、お客さんを泊め始めました。“料理できないよ～”というと、お客さんは、“こちらの方が普段食べている普通の食事でもいいですよ～”と言われるので、じゃあ、ということとで始めました。1970年3月のことです。

当時、主人は石垣島と竹富島を結ぶボンボン船に乗っていました。“船で話したおじさんの家に泊めて～”、とお客さんが来られました。1972年に復帰して日本の制度になると、保健所がうるさくなくなって、炊事場もちゃんとつくって民宿をやりました。炊事場と食堂を別にした民宿になりました。

学生さんも大勢来ましたね。昔の学生さんはお金がないから、あまり、あっちこちには行きません。お金持っていないから、私、ご飯つくるのが仕事みたいでした。お昼も、残ったご飯をおにぎりにしてあげたり、チャーハンにしたり。ご飯がないときはソウメンチャンプルをつくったり、いろんなものをつくって差し上げました。学生さんは、来たら家族、という感じでしたね。だから、今でも、当時来られたお客さんは忘れないですね。年賀状もずっときますし、何かがあったときには電話がかかってきます。その頃泊っていた人たちは、今もずーとつながっています」

三人の話から、当時の島宿の雰囲気が伝わってくる。そして、このような人情味のある竹富島が大好きになり、リピーターが増えていった。1971年に起こった買い占め騒ぎにより島が揺れ動いている中で、そのリピーターたちが、1972年「竹富を守る会」（代表者・井上幹太）を結成するほど島は若者から愛されていたのである。

まとめ

1970年代前期の竹富島における開発と保存に関する動向を要約すると、以下の通りである。

1972年沖縄返還に合意する日米共同声明発表直後の1970年春から、沖縄県八重山地方において土地買い占めが目立つようになった。1970年、翌71年、たて続けにおこった干ばつと台風の大災害は島民の死活問題であり、そこに外部資本の矛先が向けられたのである。

この買い占めに触発されて、それに対抗する形で1971年、竹富島出身者で構成する石垣島

「郷友会」を中心とする竹富観光開発株式会社が設立された。さらに同年、島民による合資会社竹富観光事業社も設立され、竹富島の観光開発をめぐる議論がにわかに沸き起こっていく。しかしながら、島出身者および島民の会社設立や、その観光開発論議の背後には、島に隣接する海中に湧き出た温泉の権利獲得に向けての争奪戦もあったとみられており、いずれの開発構想も宙に浮いて実現をみることはなかった。

この買い占め騒ぎの最中、竹富島に住み、島に熱い想いを寄せた作家・岡部伊都子は、「優雅な自然と人間が尊び合って暮す美しい心情と、清潔な生活こそが本来の人間の文化だ。真の文化を生かす島、竹富島でありたい」「島をいつまでも守り続けるのは人間の心しかない」「島自身の努力で島の文化が生かされることを願う」と、島のあるべき姿を島民に説いた。この岡部の訓えは、やがて「竹富島を生かす会」（1972年発足）の精神の基調に流れ、受け継がれていく。

一方、我が国の民芸運動をリードした外村吉之介・バーナードリーチ・浜田庄司らは、「自然と人情と生活とかが、沖縄の純粋な姿を保ちつづけている」竹富島を破壊から防ぎ、その保存を期するため、「古竹富保存会」を設立して土地買占めに苦しむ竹富島の住民を支援する。「竹富島を生かす会」は、この民芸運動とのつながりの中で生れており、民芸運動指導者の考え方をも精神的支柱に取り込み、活動を展開する。

「金は一代、土地は末代」を合言葉に活動を続けた「竹富島を生かす会」から発せられたメッセージに、「竹富島の心」というものがある。その「輝かしい自然と礼儀正しい人々が仲よく美しく暮らしている竹富島です。草も木も鳥も獣も海も砂も魚たちもみんな生き生き。お互いにこのきよらかな環境を大切に愛しましょう…」の一文の中に岡部伊都子、そして民芸運動指導者の訓えが息づいている。

開発・保存に揺れ動いた1970年代前期、竹富島は観光地としての要素を少しずつ加えていく。それは、水牛車観光、マイクロバス観光、民宿など、島民それぞれの自助努力・創意工夫による手づくり的な観光地づくりであった。そこには大資本による観光開発にはみられない良さがあり、そのことが竹富島にファンをひきつける結果に結びついていった。

1970年代前期の竹富島は、土地買占め問題を契機に島民や島出身者が島の行方をさまざまな形で探し求めている時代である。と同時に、島に熱い想いを寄せる人びともまた島の行方を案じ、その力になろうと支援した。その交流が、竹富島の観光文化のあり方を方向づけていった、とみることができる。

謝 辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成成果報告の一部である。研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げるとともに、調査研究を実施するに当たり、関係資料をご提供くださった喜宝院蒐集館をはじめ、インタビュー調査にご協力いただいた上勢頭芳徳さん、上勢頭同子さん、上勢頭達子さん、上勢頭篤さん、上勢頭享子さん、瀬戸孝さん、前本隆一さん、新田初子さんほか関係者各位に感謝申し上げたい。

注 記

- 1) 谷沢明「沖縄県竹富島における観光文化に関する考察」(『愛知淑徳大学論集』第14号、2009年、所収)
- 2) 「ねらわれる八重山の自然」(「沖縄タイムス」1971.1.16)
- 3) 前掲2)
- 4) 1970年当時の竹富島における家畜・家禽類は、牛507、豚119、ヤギ122、鶏216を数えた。
- 5) 「竹富町、土地買い占め攻防戦」(「沖縄タイムス」1971.3.30)
- 6) 「狙われる竹富島・上」(「沖縄タイムス」1971.4.7)
- 7) 「狙われる竹富島・中」(「沖縄タイムス」1971.4.8)
- 8) 「狙われる竹富島・下」(「沖縄タイムス」1971.4.10)
- 9) 「竹富観光開発株式会社設立趣意書」(1971.2.16)、喜宝蒐集館所蔵
- 10) 「前文」には、他に「〈他人ごとではない、自分のことだ。〉と、一人の洩れもなく竹富出身者全体が一丸となって取り組むべき責任があると考えます。之を踏まえて、石垣在住の心ある人々の会合、石垣郷友会の役員会、竹富部落民、地主との懇談会、竹富部落民大会、沖縄郷友会幹部並びに沖縄在住竹富振興会との懇談連絡、遠く東京郷友会との連絡等と、広く竹富人の組織へ訴えて、問題の討議を呼びかけて参りました。〉等の記載がある。
- 11) 「竹富観光についての基本姿勢」には、他に「〈かりに我々竹富人の一切の要求を認めると云ふ条件であっても、一たび土地を手放せば、ながい将来、又永久に、先に出した我々の条件が覆されて、竹富の風致をこわすようなトンデモない近代施設などがなされ、竹富が永遠に取りかえしのつかない危機におちいることは皆無だと、何人が之を保証し得るのでしょうか。本土企業者が土地の所有権を握れば、どんなことをするかは、又なし得るかは自由であって、何人たりとも之を阻止する力はない筈です。ところが、大資本にものをいわせようと、大手企業者は竹富をねらっています。しかし何百億ドルの大資本といえども私達のふるさととは、我々全員で死守するんだ、と云う愛郷心の結束の前には無力であります。〉等の記載がある。
- 12) 「竹富観光開発株式会社設立の趣意」には、他に「〈今迄島に愛着を持ちつづけなんとかして島にとどまって来た同胞は、他の離島と同じように、浮足たって来ています。其処へ本土某企業が土地を売ってくれ、観光事業をしたいから、そして皆さん島の方も多数雇傭したいと言って土地売渡しの希望の有無を調べたところ、希望者がかなり居ると云うことは見逃してはならない厳たる事実で、観光が盛んになって島が賑わい、生活の保証を得たいと希うことは島に残っている人々の切なる願いであります。〉等の記載がみられる。
- 13) 竹富観光開発株式会社の「事業目的」は、一、竹富町を中心とする観光事業の開発。二、旅行幹旋業及び観光客宿舎の経営。三、海水浴場及び水族館の経営。四、海中観光船及び釣船の経営。五、温泉浴場の経営。六、観光用地の開拓造成及び分譲。七、熱帯園芸植物の栽培及び販売。八、観光土産品の製造販売。九、観光用民俗芸能の研究紹介。十、上記の外観光事業に附随する一切の事業。
- 14) 1963年12月10日、上原秀夫は、「竹富牧場株式会社(興南牧場)」を設立する。この牧場は、竹富島の社大党(社会大衆党)支持者の協力を得て島の東部につくられた。一方、竹富島には民主党(のちの沖縄自由民主党)の支持者もいて、ほぼ同時期これに対抗する形で民主党支持者が出資して島の南部に「竹富共同牧場組合(組合牧場)」を設立した、という経緯がある(前本隆一氏談)。
- 15) 合資会社「竹富観光事業実施基本案」(年代不明)の挨拶文とも考えられる1枚の文書が残されている。ここには、「竹富観光開発株式会社設立趣意書」に対する、次の批判が記載されている。〈趣意書中の*附記事項にある外資(竹富人以外の沖縄資本、及び本土資本)の流入が可能であること云々と、特に事業目的事項の第6項にある「観光用地の開拓造成及び分譲」以上の二点を合わせ考えると、島

の人と島の人以外の持ち株の差により会社の方針はどうにでも変えられる恐れがあると同時に、又分譲においては土地の所有権が他に移りその土地の利用は所有者の自由になります。このようなことでは島全体の保護と外資の流入により島を破壊から護るために発足した筈の会社設立の意義が何であるか全く理解に苦しむだけでなくむしろその裏には何かあるのではないかと疑惑すらでてきます。次に事業目的として掲げられた十項目には具体的な提示がありません。同会社の観光構想図の中には島一周道路とか植物園など本土の低俗な観光地を小型にしたものでありそれらは島の自然の姿の特色を破壊するものであると思われます。従って現実に島に居住している人々にどのような形でプラスになるのか理解することは出来ません。〉

- 16) 「趣意説明書」には、他に、〈観光開発の基本条件として、1 島民の永久主体性、2 観光客層の制限と島内における旅行者のモラル規制、3 島民主体のメリット〈施設及び運営による島民への全面的還元〉、4 離島若者の経営参加による帰島促進を挙げ、以上の諸条件に基づく観光開発には、島民自身の開発と運営による以外にはない。〉等の記載がみられる。
- 17) 「島への手紙」(「琉球新報」1971.3.3)
- 18) 「竹富町、土地買い占め攻防戦」(「沖縄タイムス」1971.3.30)
- 19) 「“観光開発”という名の新しい形の収奪」(「沖縄タイムス」1971.4.6)
- 20) 「事業」として、次の記載がある。〈竹富島に「古竹富特別保存地区」を設定する。地区内では1940年以前の建物様式を守ること。地区内の地形、道路を一切改修せず、古跡、うたき、石庭、道路、屋敷、石垣、民家、民具、歌舞、料理、農産物、工芸を守り、その本来の価値を高揚すること。地区内の農業(畜産、砂糖、甘蔗、からむし、芭蕉、桑等)を育成すること。地区内の上布、下布、芭蕉布、みんさ等の織物、あんつく、かご、敷物、みの等の諸工芸を強化充実すること。〉
- 21) 「竹富島保存会、一九七一年五月、発起人」、喜宝蒐集館所蔵
- 22) 外村吉之介「世にも美しく純粋な姿」(『南島通信・沖縄の民芸』倉敷民芸館発行、1962年所収。『民芸』675、日本民芸協会発行、2009年、再録)
- 23) 「沖縄タイムス」(1964.4.17)
- 24) 前掲23)
- 25) 前掲23)
- 26) 「竹富島の声」、喜宝蒐集館所蔵
- 27) 玉村和彦「竹富島(沖縄)にみる観光地化への軌跡」(『同志社商学』第25巻4～6号、1974年3月所収)。復帰以前の竹富島観光客入込数は明らかでないが、喜宝院蒐集館拝観者数が竹富島来訪者数をほぼ現わしている、と推定されている。かつて、竹富島を訪れた観光客の大半がこの私設資料館に立ち寄っていたからである。1960年当時の喜宝院蒐集館拝観者は、年間わずか362人であり、1968年まで年間1万人を割っていた。それが、沖縄返還に合意する日米共同声明が発表された1969年に19,314人、翌70年に28,875人、そして竹富島が買い占め騒ぎで揺れ動いた71年にはほぼ同数の29,419人を数えた。
- 28) 1960年代までは、石垣島と竹富島を結ぶ船便は、若竹丸(45人乗り)が1日2往復するのみであったが、1972年にはホーバークラフト(52人乗り)が導入された。また、1975年には若竹丸に変わって新造船・竹富丸が就航して輸送力が格段に向上した。島内の自動車は、1971年当時、軽トラック2台のみであったが、1975年にはマイクロバス7台を含む13台に増えていた。復帰少し前の竹富島の宿泊施設は、3軒の宿泊施設があっただけで、収容人員はわずか80人であった。1974年には民宿が11軒に増えているが、それでも島全体の宿泊施設で170人の収容人員であった。なお、観光客を迎える前提となる水道の整備は、石垣島から海底送水がなされた1976年のことである。